



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	物とは何か : 物の人間学的粗描
Author(s)	結城, 錦一
Citation	北海道大學文學部紀要, 19(1), 31-79
Issue Date	1971-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33348
Type	departmental bulletin paper
File Information	19(1)_PR31-79.pdf



物とは何か

—物の人間学的粗描—

結
城
錦
一

物とは何か

——物の人間学的粗描——

結 城 錦 一

(一) 問題の源泉

我々はまづ 生活世界における 物の姿の具体的描写から はじめよう。

私は いまペンをもって、原稿用紙の上に 文字を書いてゐる。紙は 机上にあり、机の上には そのほか インキ瓶・書物の開いた頁・花瓶・花瓶には花。

小型の時計・薬の空瓶・手紙の束……。机上の品物の描写をはじめるに従って、次々と躍り出る これらの品物。私は これらの一つ一つに 注意を向けるまで、かくもさまざまな品物が この机上に載つてゐたとは思はなかつた。机の表面は これらの品物で ぎっしりと詰つてゐて、物のないところは 机の汚れた表面が 空隙を満たしてゐるので、つまりは この机の表面は、空なところが残らぬまでに 物をもって満たされてゐるのだ といふこと

物とは何か

が 次第に気づかれはじめた。

窓の外はどうだらう。庭はどうだらう。これまた 空疎でない。さまざまな樹 さまざまな草 いろいろの石。空いたところは 土と小石とで 隙間もない。大空もまた 空ではなく、白い雲と青い色との班で 残るところなく塗りこめられてゐる。私は これらの物どもの ひしめき合ふまっただ中に、これらのしろものに 取り囲まれながら、辛うじて間隙を見つけて 立つてゐるのだ といふことがわかつてきた。そして さうしてゐる間にも、私の身体は 衣服といふしろもので しっかりと包み固められて、がんじがらめになってゐるのだ。私は 何をしてゐるときも、この衣服の緊縛から自由になることが ないのだ。

このやうに 私をとりかこんで 身動きもならぬやうにしてゐるしろものの名は、我々が通例 一般的名称として「物」といひならはしてゐる しろものである。つまり我々は、「物」の中に入れびたり 「物」に囲まれ 「物」から何ものかを受けとり 「物」と交渉し 「物」に制約されて、生活してゐるのだ。我々と このやうに 密接に交渉をなしつつある存在である その「物」とは、一体何ものなのか。

このやうな物のうちには、人間が 或る用途のために つくり出したものもある。机やペンや衣服等々のものはまさにそれであつて、人間は このやうな物を 望みに従つてつくり出すことのできる創作者であるゆゑに、ホモ・ファールベルの地位を 獲得するに至つてゐる。

しかし 私をとりまく物は、決してさうした 人間の制作でないものもある。植物や鳥や猫は 「生き物」といふ特別の物だが、これはむしろ 人間の作品ではない。まして この石やあの山は 我々の手でつくり出したものではないことは、断るまでもない。しかし だからといって、我々は これを「物」でないとはいはない。山は「物」

といふには大きすぎるにしても、やはり「物」の部類である。この石は「物」と呼ぶに 丁度手ごろだ。かくて 自然のつくり出したしろものまで 「物」の範疇に入るのである。かやうな「物」とは 一体何ものか。

ここで翻へって 「物」でないものを 一応探してみることは、「物」の問題を煮つめるに、やはり役立つことにならう。「物」でないところの 一番手近な存在は、「私自身」であらうか。「私自身」は、知覚や認識や判断など一切の 主人公であるか、ないしは主観そのものであり、「物」の方は、この主体と対立する あちら側である客体である、とよく言はれてゐる。であるとすれば、「物」ならぬものとして 「私自身」を挙げてよいか。

ここで私は はたと躊躇する。それは 私が人間である限り、私を構成する 皮膚・髪・爪・筋肉 さては大腦まで その一つ一つが「物」でない とはいはれないからである。私は 外から「物」で取り囲まれてゐるばかりか、かうして身体内部まで 「物」に占據されてゐるのである。私の内部の「物」でないとどこといふのは 一体どこなのか。さういふ場所は 果してあるのか。またその私と 私の身体的物との関係は どうなつてゐるのか。また我々の生活空間に 同じやうに現出するものの中でも、「物」になり易いものもあり、「物」として取扱ひがたいものもあるが、何が ものを「物」となし、何が「物」となさしめないか。それをして「物」たらしめるものは 何か。

これらのさまざまの問を携へて、私は 「物」の正体を明かにする仕事にとりかゝる。その際 私の問の出発点が、ここに描かれたやうな 生々とした現実界の姿であることを 絶えず忘れることなく、問の屈折点にさしかかるときは、いつも この生々しい物の描写のところに 立ちもどつて、真理を そこから酌み出すことにしよう。

(二) 物理学や化学では「物」はどう扱はれるか

「物」の問題を持ち出すと、それは 物理学ないしは 化学の問題範囲ではないか、との感じ方が 一般的にある。物理学や化学こそ「物」の科学に外ならず、殊に近代の物理学のすばらしい発展は、「物」の内面にまで 鋭利な刃を入れて、その秘奥を見せてくれてゐるのではないかと。

しかし 果してさうであらうか。なるほど 私の眼前にあるすべての「物」は、これらの学問によつて その極微の構造まで解明された と認めてよい。しかし その解明と 我々の求めるところの解明との間の関連は、どう処置されるのであらう。我々は 着てゐる洋服が 羊毛であるのか または石油化学的産物であるのかなどを 少しも知ることなく 身につけてゐる。水が水素と酸素とより成る と確定するには、人類発祥以来 西暦100年まで 待たねばならなかった。しかし 人間は その間 たえず水を飲みつけてゐた。人間と「物」との交渉は、物理学的化学的本質を 素通りしてなされてゐたではないか。

物理化学的物と我々の物との不一致は、また次の場合にも 示される。コップ一杯 すなはち約180mlの水を 分割してゆくこと約80回で 水の分子に到達するといはれ、そこが 物理化学的水の極限とされる。そこに行きつくまでは、物理化学的には まだ水である。ところが我々は、80回の分割どころか、水量が一滴にも達しなくなつたときに、そこにまだ水がある、とはいはないで、むしろ「水がなくなつた」と叫ぶであらう。我々においては、水は 水蒸気でもなければ 空中湿度でもない。それは 渴きを医するか、汚れを拭ふか、ものを冷やすか、等々の役目を果たす

ころの液体 でなければならぬのである。

物理学は たしかに物の解明をめざし 物から出発したけれども、向ふ方向に 一定の目標があつたので、出発点である 物そのものから遠ざかることを 意に介しなかつたのである。それは 目標に到達するがために、一定の方針をもつて 抽象し捨象しつつ 軌道を進むのである。かくて物理化学的物とは、第一番に、見てゐる（使つてゐる、制作してゐる）人間から 物を切り離し、さらにその物から その具体性や個性を 切り捨て、そのほか 目標到達のために不要な 挾雑物の一切を 切り去つて、知的純化を行つた果ての 知的加工品である。

加工品は すでに生きものではない。物理学が 加工の途中で 挾雑物として 次々と捨て去つて行つた 何もものかの中にこそ、生きた世界の中の生きた物としての 大切な本質的なものが 存在してゐたのである。この大切なものの 本質的なものとは 何か。それを求めることをしなければ、生活世界の中の生きた物の本性は わかつたことにはならないであらう。

ここにおいて 我々が問題にしようとする 現実界における物については 物理学や化学が 何の解明もなしてゐてゐないことが わからう。つまり 物理学は「物」を扱はなかつたのである。この「物」なるものが 我々のいふところの「物」である限りにおいて。

冒頭にも述べ、今また繰返し述べてゐる如く、現実界の物とは、私の欲望を刺戟し 或ひは満足させ または不満の種となり、私に利用され、時としては 私の行動を妨げるもの、である。この布は 身体の恥部を被ひ、この帽子は 頭の禿をかくす。あの山は 人を登らしめ、この河は 対岸への渡行を妨げる。またこの海は 住まふ人種や国民のさまざまな風習の差異を つくるものとなる。かやうに「物」といふ物は 人間と無縁故に存在することがない

物とは何か

ものなのである。

すなはち 現実界の「物」は、かやうに 何かの点で 人間との間に接点をもつてゐるのであつて、この接点において 物が「物」として生きるものであり、ここに生活世界の物の本質があるのである。それと同時にまた、人間の行為の本質的なものが、物との交渉を通じて この接点において 覗きみられるのである。

かくて この論文は、「物」とは何かと尋ねつつ、「物」との交渉面を通して、人間の本質的な姿を 裏から窺ひ知らうとするものでもある。「物の人間学」といふのは、この意味である。

(三) 心理学においては「物」はどう扱はれたか

それでは次に、人間の科学の方に向き直り、心理学が「物」をいかやうに扱つたかを 検しよう。

ところが心理学には、「物」が物として登場する筋書などは 全くないのであつた。ここでは 生きた物の代りに「刺激」が持ち出されて物の代理をつとめてゐる。「刺激」とは「物」から その生命的なものや具体的なものすべてを奪ひとり、できる限り簡単に見える形象に 追ひ込んだもので、たとえば □や△のごときものである。心理学者の関心は、このやうな「刺激」を用ゐて これを試験動物 ないし被験人間に見せたり触れさせたりして、その動物 ないし被験人間の「反応」をしらべるにある。その「反応」の方も、それが鼠からであらうと人間からであらうと、その際の一切の具体的な「状況」を 捨象し去つて、 十の反応であるか一の反応であるかの観点からのみ取り上げてゐる。 心理学者の多くは、心理学の任務は 刺激→反応の關係の定立である、とはばかりことなく

定義してゐるのである。そして この関係の定立に當つても、刺戟を 数物的尺度で測られた量 として登場させ、刺戟↓反応関係を 数物的方程式で表現するのを、目標とするに至つてゐる。心理学が独立の科学として誕生して以來、この学科には 人間喪失の人間科学としての悪評が いつもつきまとつた。今や その悪しき果実は 一層みり、人間喪失どころか、数物主義の風靡する 異様な学問ができ上りつゝある。

この傾向は すでに 心理学の誕生史の中に 懐胎されてゐた、といつてよい。心理学の最初の礎は 感官生理学者によつて 敷かれ、そして方法的には、数物学者G・Th フェヒネルが別の目的で開発した いはゆる精神物理的測定法を そのまま相續して 心理学が誕生した。しかもそれ以來 もう80年もたつてゐるのに、精神物理的測定法に 殆んど改修の手を加へないまま 今日なほ重要な測定法として、この学問領域では 重宝がつてゐる有様である。このやうにして うぶ声をあげてこのかた 心理学は、自然科学のめざましい發展に目くらみ、対象の 自然科学との間の根本的差異に 盲目となつて 猛進してきた。今日でもなほ 自然科学模範的方法と測定尺度の心理学への導入は、反省もないまま ますます盛んに行はれてゐる。

このやうな学問領域で「生々とした具体的な物」の問題などを 組上に供さうとしても、まともに取りはかられるはずもない。机やコップは そのままでは 複雑で多義だから、到底 精密を尊ぶ科学的心理学の対象とは ならない、科学的心理学では、そのやうな机やコップの代りに □や△を扱ふべきだ、けだし 科学は簡素化が必要であり、心理学は科学であるから、といふことにならう。

自然科学の意味における 簡單複雑の原理が そのまま人間科学に 適用させられるものなら、□よりも 机の方が 複雑多義であることは 疑ひない。しかし 幼児は、五角形や六角形のやうな 簡単な幾何学的図形を辨別する

物とは何か

ことが、ろくにまだできない頃から、近親や 周囲の人々の顔の 複雑を極める特徴を 把へ誤らないのは、人のよく知る事実である。或る神経生理学者は、生後わずか七日目の新生児でさへ 母親と他人との声を判別できたとの確実な証拠を 提出してゐる。彼は脈膊記録器をかりて 新生児の脈膊腺と呼吸腺とを採ったところ、母親がささやかけるとときには 呼吸腺脈膊腺ともに 急に著しい沈静を示したのに、他人がささやかけたときは 呼吸腺脈膊腺ともに 殆んど何の変化も示さなかった^①。つまりこの新生児は すでに生後七日にして、母親の声と他人の声との複雑極まる特徴を、弁別的に 把へてゐたのである。この事實は、人間と自然科学的対象において、事情が すっかり逆になつてゐることを 示すものである。しかしそれにも拘らず、多くの心理学者は なほ その習性となつてゐる自然科学的態度を 改めようとせず、ひたむきに 数物主義の道に 走つてゆかうとする。この様な学問領域で人間との交渉における「物」の問題を論ずることは、お門違いの感を 免れない。ただ一抹の望みは、この領域に極めて少数ながら 良心的な研究者群のゐることであり、それらの少数者は、我々の問題提起の方向に 多かれ少かれ 関心を寄せるであらう といふことである。

(四) 哲学においては「物」はどう扱はれたか

「物」の問題が かく多くの心理学者の興味をひかず、心理学の領域で 問題として登場するゆとりがなかったとすれば、哲学の領域ではどうか。

物と人間との交渉史は、人間そのものの歴史ほど 長い。いな 下級の生物から人類までの 生物発展史の中では

更に古く長い歴史が たどられるであらう。恐らく 食物といふ物の形において、交渉の発端は 単細胞動物のところに 探しあてられるかも知れない。このやうに、生きるといふことと 深くかかはり合つてきた「物」なるものを、哲学は どう扱つてきたのか。

この場合に 問題となる「物」といふのは、人間ないし他の生物との か・か・は・り・合・ひ・の・相・手・と・し・て・の・物・の・こ・と・であり、生活世界の中の生きた物のことである。その取扱ひに當つて、何かの理論的先入観から 抽象操作を加へたり、仮説をしつらへて 都合のよい説明を 試みたりすることは、これを死物化することとなり、解決にはならないことを 断つておかねばならない。かやうな限定のもとに檢すると、あの哲学の 長い発展史の中で、殆んど「物」が まともに取上げられた形跡が ないやうに見える。

恐らく、物の問題などは、特殊すぎ 形而下すぎて、普遍学を志す哲学は、問題にすること自体が 原理的に できがたい、といふのであらう。その結果、我々の知識には、「物」の理解のところまで 大きな空疎部分が でき上つたのである。そしてその空疎部分の存在は、「物」といふ存在者に関して 我々を無知のままにしてゐるのみならず、また実は 逆に人間そのものの解明にまで 空白を残してゐるのである。特に 生きることそのことの取扱ひが 哲学の最大課題となつてきた今、生活世界の中で 人間存在と かくも深くかかはり合つてゐる相手方を、視野に 充分取りいれない哲学は、実のり豊かとは 評しがたくはあるまいか。わけでも、事がらそのものへの帰還を 呼びかけてゐる 現象学においては、生活世界の中の「物」が所有する人間的意味に もっと 注目しなければならないはずである。とくに 意識の現象学から生の現象学への展開に當つては、それが一層要請されることにならう。

それについてまづ 用語を正しくして 無用の混乱を防がねばならない。従来哲学の領域では、しばしば「物」「物

物とは何か

体」「物質」が混同された。生活世界の中の物とは、この机 この衣服 等々のことなのであるが、それを「物体」といふときは、その幾何学的構成や 力学性のみを 抽出して語ることにになり、また「物質」といふときには、その材質のみを 語ることになる。それでは「物」のほんの一面を それぞれに指し示すだけに 終ってしまふ。我々の問ふ「物」の本性は、そのやうなもので盡せるものでない。

(カントでは)

我々はさしあたり カントからはじめよう。カントにおいては、我々が認識できるのは「単に物が感性的直観の客観である場合、すなはち現象としてのみ」^②であり、これによれば、机も自動車も 現象である。感性を触発してこの現象を生ぜしめるものは「物自体」として 現象の背後にあるものであるが、それは どんな方法でも 直観したり認識したりすることが できない。

「純粹理性批判」での 物自体の導入が 諸家の酷評的となつてゐることは 周知の通りだが、その他 カントの感性論は 総体に素朴にすぎてゐる、といふべきである。しかし我々は ここで それを詳論するわけにはゆかない。ただカントが 物自体を珍重して これが感性の触発をすると、くり返して「批判」の中で述べてゐるのは、彼自身が洩らしたやうに、仮象との区別をつけるためであつた^③ほか、また フッサールの指摘するやうに、次の事情があつたと推せられることを 附記するにとどめよう。すなはち、感性の質料は 感性や悟性の 生み得るものでないとするれば、その所与の多様性や「原因」は、このやうな仮定でも持ち出さない限り、説きがたい^④ ことが それであつた。

(フッサールでは)

それではフッサールにおいては 所与の多様性はどうか。彼によれば、事実やできごとは 多様の変化において あらわれるが、時空的・空間的のうちに 一つに統一されることによって 個別的同一性（實體性）をもち、実在的な諸性質の担い手として これを 保持する。事物は ただこの統一のうちにおいてのみ、それであるところのものとして 存在する、のである。

これを もっと具体的に表明すれば 次のやうである。「たとへば、このさいころは さまざまに変化する多様性において 連続的に対象的統一として 与へられる。この多様性の経過は 無関連の継起ではなく、綜合統一のうちで 起るのであり、その綜合統一によって、多様の中で 一つの同一のものが 現はれたものとして 意識されるのである。……同一の事物が 或る時は この側面において、また或る時は 別の側面において、現はれる。このやうに 視覚的側面が変るのみでなく、触覚的・聴覚的およびその他の現はれ方も 変る。……すなはち我々は、いつもそれらの特徴を、流れゆく多様性の統一として 見出すのである。……また感性的知覚においてのみならず、たとへば想起された事物も、さまざまな 側面や展望において 現はれる。」

ところで 意識は 多様な志向性を含むが、その志向性も 顕在的のもののみではなく、潜在性のものをも含んでゐる。そして それぞれの体験は地平をもつてゐる。地平とは あらかじめ描かれた潜在性である。従つて 何ものかの意識が 同一の対象の意識であることが 可能なのは、意識が この地平志向の様式を そなへてゐるからである。

なるほど ここにある机は、さまざまな角度からの 印象の綜合として ここに現はれてをり、見えないあちら側も 思念的に加へて 見られてをり、過去の思ひ出も これに附着してゐる。すなはち さまざまな志向性の綜合の

物とは何か

統一体として 机は ここにある。しかも 見てゐる私の体験は この間 流動して止まないが、その体験の流れの中で この机の体験は それとしての同一性を失はない。意識における机は かく如き構成であるといふことは、一応 肯けよう。

しかしこのやうに 意識の面における物を取扱つて、「物」の本質的なものに触れたことになるのであらうか。我々の生活において 我々との交渉に立つ あの生き生きした「物」は、その意識に向けた面だけを取りあげてみれば それで盡せる、といひ得るものなのであらうか。フッサールの このやうな「物」の解明は、「物」の一つの側面の解明に すぎないではないか。その場合 たとへ「生活世界においては、具体的な事物として現はれるものはすべて物体性をもつてゐるから、この世界において営まれる生活の中では へ感性的にへ経験する 直観への還帰が 卓越した役目を演じてゐる」^⑤としても である。たしかに「純粹に 事物の物体的な点に 注意するならば、知覚的に 見る・触れる・聴くなどにおいて、つまり視覚的 触覚的 聴覚的などの側面において 事物は現はれる」^⑥ことはあるにしても、そのやうな「物体性」ないし 意識に現はれる側面のみをあげて、「物」の「物」たるゆゑんが盡せる と考へることが、當を得てゐるであらうか。

さらにまたフッサールの説き方では、多様が 一つの統一に 帰しなければならぬ、といふ必然性が 理解できない。多様には いくつもの統一の仕方が 可能であり、多様の或る位相が 全く別の多様の 別の位相と結合して、思ひもかけぬ 別の統一体になるとか、幾つものに分裂した 部分的統一体に 分れて現はれる とかのことが、あり得るではないか。多様が フッサールの期待してゐるやうな たった一つの統一体に いつもうまくまとまるといふ保証は どこから与へられるのか。さらにまた 意識が たえず 新しい意識様式へと 移行しながらも、同一の対

象についての意識である。との性格を 対象に 賦与することのできるといふ、かくも重要で絶大な働きをする 地平なるものについて、フッサールの説明は なほ不充分である。これは 彼の指摘する 意識の綜合機能と 同位に列すべきほどの 重要概念であり、対象の同一性を生み出すものとしては 更に一層重要なものと見られるのに、比喩に近いほどの形のまま使用せられてゐる。厳密学をめざす現象学では、この地平なるものの正体を もつと学問的に展開して 示さねばなるまい。

(メルロー・ポンティでは)

フッサールから転じて、フッサールと同一線上にある メルロー・ポンティの知覚見解に、少しく触れよう。

彼は「知覚の現象学」の中で、フッサールと似よりの 対象に関する 多様と同一性との問題を 持ち出す。「たとへば 私の隣家は、セーヌ右岸から見たとき 空中から見たとき 屋内に入つて見たときとで おのおの全く異なる現はれを 見せる。家そのものは、これらの現はれの どれもでない」と彼は指摘し、結局 家そのものとはこれらの諸展望のすべてを 生じさせるが、自体としては 展望をもたぬもの として、いはば どこからも見られないことのない家である、と言ふ。さらに彼は、見るといふことは さまざまな角度から対象を眺めること であるから、結局 家そのものとは どこからでも見られてゐない家 であるのではなくて、却つて あらゆるところから見られた家である、と言ひ直す。そして 或る対象を見るとき、その周囲にある他の対象が 互ひに 他の対象の鏡となるのだ、と附け足すのである。

しかし 変遷する現はれの多様から 視角の移動 ないし まなざしの推移によつて 物そのものを取り出す 意識の機能は、他の対象が鏡となる といふやうなことでは 説けるはずがない。メルロー・ポンティは 一応 フッ

物とは何か

サールに做つて 地平を持ち出して見はするが、地平の機能を 心理学の 図地転換のごとく 理解してゐるのは、心理学的事実の意味を誤認するもの といはざるを得ない。また 地平は 意識における潜在性のものを含む といふフッサールの意味は、今まなざしから外れた対象が 間接視野に「地」として保存される といふことでは全くなく、「地」や「図」とは 全く関係がないはずである。しかも 誰でも経験するやうに 対象の同一性は、時をへだてて受けとつた 展望の諸側面からでも 成り立ち得る。時間が経過して さきの展望が 全く視野から消え去つてしまつても なほ対象の同一性を把握できることが多い。多様の統一者が 図地関係や 視野の機能などではないことは、これでわからう。フッサールの地平は そのやうなものでなくて、意識の志向性・地平なのであり、「なほ知覚されずに単に期待されてゐて さしあたり非直観的な空虚さにおいて 今後知覚されるものとして 予測されてゐる側面（未来志向）が含まれてゐるやうなもの」^⑤なのであつて、だからこそ「対象とは 意識のそれぞれの瞬間において 意味上その対象に所属する ノエシスの志向性の指摘である」^⑥とされ、またさればこそ 地平は多様の統一者だ、とされるのである。図地関係と 志向地平とは 次元が同じでない。メルロー・ポンティは、フッサールの意識の志向性を一部まなざしに おきかへ、また志向地平を 心理学的図地転換に おきかへることにより、 結局 混乱をまき起したのである。

かく通覧して、カントはもとより フッサールにしても メルロー・ポンティにしても、「物」を専ら 意識の面におけるあらはれとして 把へることに 終始するのを見る。しかし 我々をもつてすれば、「物」には 意識的性格からは 把へられない 何ものかがある。意識の側面から これを把へようと、志向を盡し まなざしの角度

をさまざまに変へてみても、なほ見盡し得ない何ものかが残るのである。対象は「射映」を通じて 一面的にしか把握できない といはれ、対象には 意識によって汲み盡し得ぬ 存在の超越性がある^⑧、とされるゆゑのものにここにある。また 対象の把握は 不十全にとどまらざるを得ぬ、といはれることも ここに因する。「物」の本性は 意識の窓から覗いても、到底見えないものである。物の本質は、もっと他の層に 求めなければならぬのである。ここでこの論文をつづけるため サルトルに移らう。

(サルトルでは)

サルトルは、人間の直面する物が 道具的功利的 その他 人間交渉的な性格を 帯びてゐることを 指摘し、存在の探究において、このやうな人間的交渉の一切を 洗ひ去つて 存在そのものの地平における存在を求め、「即自存在」^⑨をあげた。即自存在は それ自体で存在する存在 であり、意識からは絶対的に超越し、全く偶然に それとしてそこにあり、そして それが現はれるためには 意識存在(対自存在)を必要とするが、存在するためには 意識を必要とせぬ といふ存在である。

かやうな サルトルの即自存在は 人間的色合ひを全く帯びない 超越的存在であるから、我々の問題にしてゐるところの 具体的で かつ 人間くさい物とは 全く対蹠的なものである。

サルトルは 自分の現象学的存在論を掲げ、フッサールが コギトの中にのみとちこもつて 対象を 単に意識にあらわれるノマエ としてのみ把へるにとどまったことを 難じてゐる。しかしサルトルみづからは 意識主義をぬけ出したつもりかも知れないが、そのいふ 即自存在の絶対超越とは 意識からの超越なのであり、超越の形で 実なほ意識とつながりをつけてゐるのである。つまり 即自存在は 意識を越えてゐるけれども、越える形で 意

物とは何か

識との聯関は なる 思想的に保たれてゐるのである。我々は 超越を 行為の層に追ひやることを 求めるのである、それを 次第に明かにすることになるのであらう。

(ハイデガーでは)

意識主義を避けた哲学として ハイデガーに視点をうつし、そこでの物の取扱ひ方を しらべよう。彼は 意識次元から 人間存在を離し 直接に 人間を現存在と規定して 独特の存在論を組織してゐることは、周知のことである。その際 人間は 関心的存在として世にあり、それに関して 物が登場することになる。

彼によれば 現存在である人間存在は「^{ソルゲ}関心」の権化であり、そこから 人間の世にある関係は 本質的に「^{ベルゲン}配慮」を含むことになる。「配慮」とは、気を配り 関係し 作り出し 失ひ 観察する 等のことである。かやうな

配慮のもとに 世に出てくる存在者は、単に 人間の「^{フョール・ハンデンザイン}前に横たはる存在者」でなしに、何かの役に立つとか 何かのためのものとか といふ 性格を帯びる。我々の世において 出会ふ家は すなはち住む家であり、ペンはいふペンである といふやうに。かやうな存在者は「^{ツウ・ハンデンザイン}手もとの存在者」といはれる。手もとの存在者は 存在様式としては 前に横たはる存在者よりも 人間の世においては 根源的である。これに對して ただ横たはるだけの存在様式は 手もと性を無視して ただ漠然と凝視するときのみに 現はれるもので、いはば欠如体として 理解すべきものである、と。

ハイデガーの 手もとの存在といふ存在様式は、我々のいふ 物のそれと 甚だ近縁であるといひ得よう。しかし 手もと存在を それとして支へるところの ハイデガーの「関心」は、フッサールの志向性と同じく 志向的方向づけにとどまり いまだ 行為的のものとは なつてをらない。関心は 観察するとか 気を配るとか 関係するとか

の いはば静観的態度のものに とどまつてゐる。しかし 本来的に 人間の関心とは、もっと能動的にして生産的な面をもつもので、その本は 行為的なものである。それは 単に 意識が志向的に存在する といふことを越えて、現実に 外に向つて働き出す行為である。このやうな意味で 関心を 行為的次元で把へたならば、ハイデガーの体系は もっと 我々の賛するところとなつたであらう。しかし遺憾ながら 彼の存在論の体系は 全体を通じて 静観的であり、人間存在も 行為の次元で把へられるに 至つてゐない。

ところが ハイデガーの 折角のこの考察——世に関心をもつて臨む人間の存在 および手もと存在——などは、後年次第に 彼自身が 放棄してゆくかに 見える。「存在と時間」の著から約十年後の 1935—1936における講義を出版した「物への問ひ (Die Frage nach dem Ding)」の中で、彼は 物について 物の特殊性に触れ、我々が 物を指して 「このやつ」「あのやつ」と呼ぶことをあげ、この特殊性たる「これ」は、我々自身と物との双方に 等分に依存し また属するもので、我々と物とにおける 時間空間に基づくことを 述べる。もし二つのものが お互ひに似よりであれば、「このやつ」と「あのやつ」との間には ここにあるか あそこにあるか ないしは 先に出てくるかあとに出てくるか の相違があつて、結局 普通の「物」を特殊化するのは この時間空間だ。それゆゑ「物とは何か」の問ひは 「時間とは何か」「空間とは何か」の問ひを含むことになる、と彼は述べる。

この著は 物の説明を通じて カントの解釈を 志向したものであることを、念頭において 見るべきであらう。しかしこの場合 物に関して問はれる「時間とは何か」「空間とは何か」の問ひの中の 時間空間も カント的先験的なものであるべきでなく、人間と物とに 共に依存するところの 人間—物の間に 生ずるものでなければならぬといふ。しかし我々は 普通のものの特特殊化するとき、かく單純に 時空間関係(それが半ば人間的意味のものであつ

ても)に 依りかかるだらうか。自分の家と他人の家との差は、「この家」「あの家」の差だけで 片づくであらうか。ここに「存在と時間」に示されたやうな 物と関心との 密接な関係は影うすれ、物は 再び人間から遠いところにおいて 抽象化され、かつまた 意識次元に近いところに 持ちゆかれた感がある。

さらに ハイデガーの後年の いはゆる「転回」のあとになると、さきの「関心」との関聯における 物の扱ひ方は 全く姿を消すやうになる。「存在と時間」のあと約30年後に出された「物(Ding)」といふ この期の論文が、「Vorträge und Aufsätze」に 収録されてゐる。それによれば、「物は物として認められもせず 物として思考にもあらはれることができないでゐた」^④が、そのやうな「秘匿された 物の物たるところ」を問ふことが 時間を問ふことになる。「物こそは 大地・大空・神々しきもの・死すべきものの四者を 取り集め これを背後にかくし またそれを映し出すところに 成り立つもの」と彼は述べる。「例へば 壺には 泉から酌まれて 泉を宿す水が 注ぎ込まれるが、泉は もと雨露の大空からの 贈り物であり、水は 大地と大空との 婚姻の贈り物である。また水は 死すべきものの 渴きを医し 会合を楽しませ 神性の目的にも 捧げられる。壺の本質は かくてへ注ぎ入れ贈るゝことに あるのであつて、このことのうちに 大地と 大空と 神性と 死すべきもの の四者が 宿るのであり、この四面的な単純な〈蒐集〉が 壺の本質なのである」^⑤と。

すでにこの頃は ハイデガーは 学としての存在論の樹立を 放棄し、思索は詩作だ といひはじめてをり、その後の彼の 思索とも詩作ともつかない この開陳の中での 壺の本質の叙述は、ひどく美辭に盛られるが、我々世界にある壺には 種々雑多なものであるであつて、骨壺や痰壺の類まで 壺の部類なのである。これらを一視同仁 壺の仲間に加へた上で、なほ 壺の本質は「注ぎ入れ贈る」ことにある などといひ得るであらうか。このやうな種

類の壺の中にも 神性が宿る、といふのであらうか。

ところで かくさまざまな命運を 壺に負はせたのは 人間である。人間は 「物」をつくり出し、そして物に宿命を与へる。造物主の役目をなすが、しかし 一たび「物」にその命運を負はせ終ると、今度は 「物」の方から人間に呼びかけをするやうになり、地位は まさに転倒することになる。家は 人に住むやうに働きかけ、賽銭箱は 銭を投げるやうに 人を誘引する。かくして 一旦人間が 「物」の命運をきめるや否や、「物」の方から人間に向つて 「用」の働きかけがはじまり、「物」のその呼びかけに應じて、人間の方が 物に向つて その 行為をきめるやうに なつてしまふ。かくの如く、「物」と人間との間には、互ひに主となり従となるほどの 密接な相互依存的な関係が あるのであり、このところにこそ、「物」の秘匿せられた本質が 横たはつてゐるのである。我々は やがて その事を一層明かにし、またその依存関係の機微を 見届けることにとりかかる。

(五) 我々は「物」をどう考へるか

かくのごとく「物」は 哲学においては 殆んど 全く意識の面において 探究され、その本質も 専ら 意識との対応の層において 求められてきた。しかし「物」は、いかに意識面における 追求を盡しても、意識層においては なほ見つくせないものを 残すのである。

この机は、真上から 真横から斜からと 見る角度を異にすれば 種々に見える。微分的変化をもつて視角を変へて 探り眺めても、それで 机が 机としての十全の現はれをもつた と言ひ得ない。これらの視角に應じて

印象 ないしは感覚与件は 全く多様に 出現する。これらの多様から 一つの机といふ同一対象に 帰着するに
は、顕在志向に加へて 過去志向や 未来志向を 連続的に配した 地平の参与が必要だ、とフッサールは考へる。
ところで 人間や猫を相手とすれば 事態はなかなか簡単でない。机とは違ひ、今度は 対象の方で 動きまはる。
刻々に 時間空間的多様がそこから起つて その多様が 視角の変化から来る 多様の上に重なり、事態は 甚だ複
雑になる。顕在性志向に加へて 未来志向は この際 どういふ姿のものになるのであらう。この場合 地平となる
ものとは 一体何であらう。ところが 一方実際の事態は といふに、机の場合にも劣らず いなむしろ それにも
まして 直覺的に それを 一人の人 一匹の猫 と認めることができる。その判断は 殆んど瞬間に近く、まだ 対
象の多様な現出が 揃はないうちに、一瞥して 対象の同一性が 把握できる。これはどういふわけか。そこでは
過去志向も未来志向も 頼りにする必要がないやうに 見えるではないか。

また 知覚が 対象の多様な現出（すなはち射映）の 連続的聯関を通して、対象の 自同的对象としての統一か
ら 対象の同一性を得る、といふのなら、時間をへだてて会った 同一人から得る 二つの時点における 感覚与件
は 決して 同じに保たれないから、それぞれの多様の統一からは 別人が現はれなければならないまい。ところが實際
は 同一人が出現するのは どういふわけか。

物の自己同一性といふものは、フッサールのいふやうな、複雑にして高度の知性 をもって処理せねば 現はれ得
ないものではない。鳥は 自分の縄張りや ねぐらの自己同一性を充分に把握してをり、犬は 主人の自己同一性を
確実に掴んで 誤まることがない。物の同一性は 決して 複雑かつ高度の 意識地平の処理などを 待つことな
く、直覺的に 意識前層において 成り立つものである。

「物」を 意識の層で受けとめて、見られる 触れられる 知覚される 有体・存在 と取扱つて、それで 盡されるかどうかを 更につきつめるため、試みに 机の定義を問うてみよう。平な板をのせ 四脚をもち 人の座位の高さに応じ かくかくの感性と件を与へるところの 有体的存在として、その有体的状況を 具体的に列挙してみたら、机の定義は できるだらうか。問ふまでもなく、それではなほ 机の机たるところを 盡したことになるまい。材質も 色彩と件も 触覚と件も、机の机たる本質と 関係がない。家や猫や その他 凡そ「物」といふ「物」について 意識の層で扱ふときは、そこに 盡せない何ものかが 残るのである。そこで フッサールらのやうに 物の知覚には 「本質必然的に不十全性が属してゐる」^⑤とか、「対象は酌み盡しがたい」とかいふやうなことを 言はざるを得なくなる。しかし 机の机たるところは、脚の数や 平板を載せた構造 とかいふところに あるのではなく、その上で読み書きができること にあるのである。家は その中に住んで 雨露をしのげるところに、その本質がある。「物」が「用」の面にもつところのものが、すなはち その物の本質なのである。

この本質は、形相的のものでもなく 質料的のものでもない。形相と質料との一対の中には 入つてこないところに、本質的なものが 生きて動いてゐるのである。「物」の「用」は、意識の層のものでないから、意識の面で把へようとするば 超越的のものとなつて 宙天高く逃れ去つてしまふ。

今や我々は 物の本質を「用」に見つける。こゝに「用」といふは、作用・機能・効果のことをあらはす 東洋風の用語である。「用」は 無形のものであり、動的なものである。これに対し、静的な構造・組成・形質などを表現するに、「体」の語がある。「体」と「用」とは、東洋において しばしば対語として 用ゐられた。この対語を使用して 表現すれば、我々は 物の本質を「用」の面に見るのであつて、これに対して 在来 の西洋哲学ではこ

物とは何か

れを「体」の面に求めてゐた、といふことができる。

物の本質は「用」に存し、「体」には存しない。従つて家は住むといふ「用」をみたすことができるものならば、樹の茂みや洞窟も家となる。枕は膝枕といひ草枕といひ、頭を托するといふ「用」に叶ふものなら、形質（体）にかかはらない。物の本質はかく用ゐることにあり、形相や質料とは何の關聯もないから、物はその都度さまざまな形相的あらはれを取り得るのであり意識への現出の上では似ても似つかないものまでが、同一者となり得るのである。物の同一性とは、用の同一性のことに外ならぬ。

「物」の生成

我々は「用」が物の本質をなすといふが、この考に立つとき、その本質が流動するものの上に おかれることに注意しよう。従来 本質とは、流動してやまないものの 背後に存する 不動にして変らざる 普遍的なものと解されてきた。本質を把握するには、想像意識の自由操作によつて 類例的なものを変更してゆき、その際の 種々なる変更体の重なりの中で 変らないものを掴み、これを 同一者として直観する といふ方法を経なければならぬ。これが 西洋伝統の本質の求め方であり、フッサールの本質直観^②も かやうな操作を経るものである。

かやうに 本質は、西洋流儀では 静止固定した 形相^{チイキ}に求められてゆくのであつたが、このやうな本質の考へ方は 今や 放棄せられなければならぬ。「用」に本質を求めるとき、変容し流動するものの中に 本質をおきなほすことが、要求されてくることになるからである。

「用」に本質がおかれるとき、家が家となるのは、その中に住むといふ行為が 顕在的にもせよ潜在的にもせよ、

あるときだけである。机が机となるのは、その上で読み書きをする行為が 何かの形でその都度、そこに存在せねばならぬ。もし 腰をかける行為で対処すれば、机は変じて 腰掛となる。枕は 頭を托するとき、その托する行為のもたらす「用」によって、その都度、枕となる。「物」の本質は、かくその都度、人間行為が「用」を通じて「物」に賦与するのであり、これによって、その都度、そこに 物が新たに生成し、または消滅するのである。

この「用」による生成消滅」といふ表現は、文字通りに受取られなければならぬ。「物」を 超越的にしか解し得ない人は、この表現を、文学的表現めくものと、受取るかも知れない。しかし「用」によって「物」がその都度、生成する例は、いくらかあげられる。心理学者 K・レヴィンが、戦争の際に、戦ふ人間として見た、野原の光景が、戦のあと訪れたとき、全く似てもつかない別のものになつてゐたことを、記してゐる。戦の最中には、身をかくす遮蔽物でしかなかったものが、平和の再来のときには、樹木や草ある丘に變つてゐたのである。また災害の場合などに、咄嗟に、部屋から避難する場合には、机や椅子などは、ただの障害物と化し、後に回想したときに、それが、机や椅子であつたとは思へない、といふやうなことは、しばしばある経験である。我々は「物」を固定的に見る固定観念を、捨てなければならぬ。「物」は、その都度生成するのである。それを生成させてゐるものは「用」なのである。かくて言へば、「用」なり「物」を生成させる、などといふことの通用するのは、人間の制作する物の範囲でのみではないか、との反論が起らう。しかし、このことの通用範囲は、凡そ「物」といふ「物」の全般にわたる。かしこにある山は、登るといふ、顕在的ないし、可能的な行為につながつて、山となつてゐるものである。宅地開発業者の眼には、それは、土の突出部にすぎないし、地球の研究者には、地殻の皺に見えるのである。我々にとっては平坦な庭の土も、蟻にとっては、急峻な山坂の連続だし、土の凹みや雨水のたまりは、大沼や湖である。すべて製作品

物とは何か

であれ 自然物であれ、それが 物なり対象となつて 我々の前に それとして現はれるためには、行為的なものと
關聯を もたなければならぬのであり、行為的なものとのつながりによつて、その都度 物は 「物」としてでき
上り、または 姿を没し去るのである。この場合 かやうな生成生成のうしろに、何か不変にして普遍的な 実体のご
ときものや、固定した 基体のごときもの がある、と考へることは、形而上学的思考の残渣である。

またこの事態を解して、それは 物に賦与する「意味」が変つたのであつて 「物」そのものは変らない といふ
考に立つことも、形而上学思考態度の考へ方である。物・その・ものといふ 物自体風のことを想定したり、または 物
の背後に 変らない基体のごときを想像することに 通ずる この種の考へ方は、清算されねばならない。物の「意味」
は 行為に対する指示であり、まさに我々のいふ「用」に外ならぬ。

行為の層は、意識の層よりも 原始的であり 始源的である。それは 一層 生きることに接着してゐるが、遺憾
ながら、在来の西洋哲学は ギリシア的伝統のもとに、行為をさげすみ 知性を偏重し、また 意識に重点をおき
きてきたため、行為の意義に 検討を加へることを怠り、それによつてまた 生きることの問題の取上げを 歴史的
に ひどくおくらせる 結果となつた。

明証としての会得

意識の層で解き得ないものを なほ意識の層から見ようとする かやうに執拗な 意識へのこだはり、どこに由
来するのか。これは 近代哲学が デカルトのコギトを原点にとるから でもあらう。フッサールもまた コギトを
的確な足場として 登場したのであり、この出発点の ゆゑに、意識の下層にある 行為的なものを見極めるこ

とができないでしまった。後年 意識の現象から生の現象学へと 移行してから後においても、その生の現象学になほ空疎のひびきがあるのは、これがためである。サルトルやメルロー・ポンティに至つては、その主張はともかくとして、実行してゐるところは、なほ意識主義を 一歩も出てゐないものである。ハイデガーも、その存在論において 意識については 何も語らぬけれども、その体系を通じて 意識主義者のそれと共通した 静観的な姿勢が背後にあり、行為の意義を 理解するには至らない。物を物たらしめるものとして、人間の世にあるあり方を 基本的なものとして 指示しながら、関心における 行為的面を 充分取り出さなかつたため、物の究明のみか 人間存在の 本質的なものの追求に 徹底し得ず、後年は 転向したと宣して 昏迷に陥つた。

デカルトの コギトを通過する明証への途は それ自身誤つてはをらないけれども、これは 思惟を通過して明証に到達する途を 示したものに過ぎず、逆に 明証なるものが、思惟による懷疑を通過する以外には 得られないもの と解するならば それは重大なる誤りである。明証は、リオタールがあげてゐる例のごとく、「その壁は黄色であるか」との問ひに 答へを得るためには その部屋に入つて見る必要であるやうなものである。彼は 語る事物そのものが 骨肉のまま ぢかに意識に触れることによつて 明証が得られる、といふが、事物がぢかに骨肉となつて触れるのは、意識に対してではなくて、先意識に対してであり、彼の言ひ方を 修正して借用すれば、事物が骨肉となつて 身に触れることによつて 明証が得られる、といはねばならない。事物は ぢかに行為の層に触れてくるのであり、行為はそれに応じて 事物を 明証的に身に受けるのである。事物は かくて分つたものとして「身につく」、行為的に消化されるやうになる。絶対に不可疑な意識として 直接に事象の前に立つ といふ「必然的な」明証とは、かやうな明証であるべきであり、「我あり」の明証もまた、生きることに触れての 生の会得の中アポクリ

物とは何か

に根源的に与へられる。そして生の会得は、知性や観念作用においてではなく、行為の層において成り立つのである。会得とは、行為をもつて受ける、といふことであるのである。

意識における「物」の現はれ方——対象

以上見てきたやうに、物の成立は行為的能作の成果であつて、その成立の基盤は意識層に先だつ行為層のところにあるけれども、その成果は、意識面に投映されてはじめてそこで現はれとして把へられるものになるのである。我々はこれから意識面に視点を移して、物が意識にいかにも現はれて出るかを検しよう。

意識面に投映された「物」の像は、対象として現はれる。対象とは自己同一性をもつて独立の個体となつて現はれる存在である。その独立は、私からのみならずまたその周囲からの独立をも含む。そしてまた対象は何らかの形態をとつて現はれ、特に知覚の対象においては、それははっきりした形象となつて出現する。以下この現はれ方の一つ一つを具体的に取りあげる。

問題となる箇所を整理すれば、次の諸点になるであらう。——(一)対象の個性・独立性はいかにして成り立つか。(二)対象の自己同一性は？(三)対象性客観性は？(四)形象性は？等、それぞれいかにして対象においてあらはれるか、である。従来は対象を論じて、これらの諸性格が対象の上に存することを自明のごとくに取扱ひ、それらがいかにして対象に賦与されるか、またこれらの諸性格が対象に賦与されてゐるといふことが、対象をいかにさせてゐることになるのか等についてのつき込んだ追求は、少しもなされなかつた。

しかし対象に本有的のものごとく見えるこれらの諸属性も、人間の行為に関する諸条件によって対象に与えられるものであることを、知らねばならない。対象がこれらの諸属性を具して対象として現はれるのは、認知する者の行為的条件が整はなければならないのである。以下我々の「実験現象学的」探究の成果を提示して、そのことを説かう。

対象の個性性——個体と領域

まづ対象の個性性の問題を取りあげよう。物であれ事であれ、一つの物とか一つの出来事とかいふやうに個体の形をとる。アリストテレスの「トデ・ティ」とはまさにそれであり、それは「ここにあるこのもの」、と指し示し得る形で意識に現出するものである。しかしこのやうに対象が個性性を帯びて現はれるのは、何ゆゑであるか。我々は決してそれを自明のこととして通用させることはできない。

個体の形をとるといふことは、どういふことなのか。個体は *Individuum* であるとして、そのままにそれを不可分のものと受けとり、不可分性の追跡をなしたやうな個体論はあるが、個体は決して不可分ではなく、そのやうなところに本質があるのではない。個体の成立については、不可分性よりもそれが外部から分離してある存在であること、それ自身に限界があること、の方に重要点があるのである。すなはち或るものが個体となるため「ここにあるこのもの」となるためには、その領域が他の領域から限られて切りとられてゐるといふことが、前提とならなければならない。この「他の領域から切りとられて」といふのは、他の個体からも周囲からもまたその背景からも、限定され分離されてゐる、ことを指す。かやうな領域の限定と分離とが、個体成立の前提となる

物とは何か

のである。ただし、こゝに限定といふのは、限定のある状態といふのではなく、限定するといふ行為である。すなわち、限定とは、対象となる領域を、それ以外の領域から切りとり離す操作であり、この操作によって、個体が個体として成立するのである。

領域を切り離す操作としては、二種類のものがある。その一つは、運動を介在させるものであり、他の一つは、輪廓の働きを借るものである。以下、その一つ一つについて、詳細に説くことにしよう。

(運動による領域分離)

今或る物が、その背景に融け込んで、知覚的に背景と区別ができなくなつてゐるとき、この物を動かすと、直ちに、物は、背景から分離されて、それとして、知覚的に分れる。たとへば、闇の中にひそんでゐる動物が、身体を動かすと、その姿が、闇の中から、知覚的に取り出される。この原理は、動物たちにも、掴まれてゐるから、獲物や敵から、身をかくす動物は、静止することにより、みづからを、相手の知覚的背景に融け込ませ、反対に、存在を誇示するときには、大きく動き廻ることにより、自分自身を浮き立たせて、相手の知覚野に、出現する。かやうに、運動を中介者として、領域の分離を行ふことができる。

運動が、かく領域の分離をなすに役立つのは、M・ヴェルトハイメルのはゆる「共通運命の因子」^⑩の活用である。物を動かすとき、この動きに直接つらなつて、移動の運命を、共に荷ふ限りの領域を、運命を共にせざる領域から、異質のものとして、知覚的に、選びとらしめるのである。

(輪廓の機能 輪廓による領域分離)

静止する形象において 領域を分離するには、「輪廓」の力を借りなければならない。今この紙の上に □ を描くと、この線は その囲んだ内部を 分離独立させ、ここに 四角形といふ対象的領域が 独立的にでき上る。それに附随して 周囲の部分との間に、心理学者のいはゆる 図・地・関係が成立する。この図地関係は 地域自体に固着したものでなく、空疎に見える領域が その都度 地になり、実質的対象的に見える領域が その都度 図になる といふやうに、反転するものである。この場合 輪廓そのものは いつでも その都度図に見える方に所属して 現はれるのであって、決して 地に属しないことに 留意しなければならぬ。輪廓は 二つの領域の境界を分つ 働きをもつけれども、一旦 領域が区分されてしまへば、いつも 図となる方に 所属するやうに現はれる。

たとへば 空と山との境の線は、いつも 山の姿を示す 山の輪廓であり、決して 空の輪廓線とはならない。また我々が見る海面では、空気と海水との接する面は いつも海の表面である。だが 海に生きる魚から見れば、それは 空気面の輪廓であらう。かやうに輪廓は、その都度 見る者にとって 対象的に見える方に「所属」するのである。逆にまた その帰属によつて、その領域が 実体的に見え 対象化するのである。そして その輪廓の機能をかくあらしめ その帰属を その都度 定めてゆくものは、限定操作といふ 行為的なものである。

續つて 限定操作が 充實的に働かない場合のことも 考慮しよう。領域の限定分離が不充分となれば、限界がぼやけ 対象と背景とが融合し、それとともにまた 対象は 知覚主体との距離を失つて、主体と融合しはじめる。つひに 対象は 主体と合一して、自他の区別が できがたくなる。

試みに輪廓の限定機能を 成り立ちがたくじてみよう。そこで 我々は 物の輪廓を わざと 把握できにくい状

況において、それが 物の独立性を 低下させるかどうか、を検討した^⑤。物の輪廓を把へにくくするのは、その物をたえず動かすとか、又は 度の合はない眼鏡を用ゐて視るとか、明視距離を外れて観察するとか、すれば、達せられる。その結果、輪廓の不明明化に伴って、物の表面の色は いはゆる表面色から平面色^⑥へと低下し、容易に周囲の照明と混色することが 確められた。混色し易くなるといふことは、心理学で「色の恒常性」の低下 と呼ばれる現象で、恒常性は 領域の対象性の 指標である。従って その低下は、その領域が 輪廓の不明確化とともに、周囲からの独立性を失ひ おのれの対象性を 低下させてゐることを 示すものである。かくて 輪廓が 物の独立性対象性に 深く関係してゐることが、この事実からも 読みとられるであらう。

味覚・嗅覚・痛覚・温冷の感覚などの いはゆる下級感覚は、視覚や触覚のやうに 対象的性格を帯びることができ、たとく、何となく 「私の感じ」といふ 主体的性格の色合ひが ついて廻る。これは この種の感性分野では、領域の限界が はつきりしないからである。さらに 尿意・悪心・息苦しさなどの類は、領域区分などの 全くできない 原始的段階の 経験種類であり、そのため 全く外界との区分もなく 「私」と対象との区別も現はれない。

対象が対象となるには、かく その領域を 他から区分する限定操作の働きが 前提になければならない。限定操作は、主体の 能動的な行為である。つまり 対象を対象たらしめるためには、主体は それに應ずる 行為をもつて、能動的に対処せねばならない。この能動的な 働きかけを欠くか、ないしは不適合に 対処すれば、対象は 対象として現出しないで、主体領域に 融け込んでしまふか、背景の中に 埋没してしまふ。

それゆゑ 対象は 即・自・的・に 対象であるのではない。また それは決して 絶・対・超・越・ではない。サルトルのいふやうな、それ自体で存在し 実体的なものとして 完全に自己同一である、といふやうな 即自存在といふやうなものは、認識論的にも 存在論的にも 存在し得ないのである。なるほどこれは 意識の働きをもつては、あらしめることも あらしめざることも できず 手のとどかぬ超越であるが、それは 意識に対する超越 であるに過ぎず、行為に対しては 超越したものではない。在来哲学は 意識の層からのみ 認識問題を扱つたし、現象学もまた 意識の層に 久しく低徊した。それにとつては 物は いつも超越存在で始終した。しかし現象学が 意識の現象学から 生の現象学へと進展するとき、それは行為の方へと 意識を のり越えなければならない。存在論と同様であつて、意識の層を通して 存在をさぐり当てることは できないのである。我々はすでにさきに 存在論について行為の意義を説いた。存在論においても 行為の意義にめざめなければならないときに 至つてゐる。

対象の自己同一性

対象はまた 自己同一性を もつといはれる。これは メルロー・ポンティのあげてゐる例のやうに、セーヌ河岸から見たあの家と 屋内に入つて見たこの家と、意識に現はれたものの上では 似てもつかず、印象としては一つの共通性もないのに、どうして 隣家の家といふ自己同一性が 生ずるのか、といふやうに、感性質料の多様が自己同一的な対象に帰着する 方途の問題に つながつてゐるものである。この理解において 意識主義的立場を固執するために、潜在志向に頼つたり（フッサール）、他の家や樹木が 鏡となつて 見てゐるからだ（メルロー・ポンティ）といふやうな 無理な論を しつらへたりせねばならなくなる。

物とは何か

しかし 対象の自己同一性は、「用」の同一性に基いてゐるのである。セーヌ河岸から見たあの家は 隣人の住む家なのであり、屋内から眺めるこの家もまた その隣人の住む家なのである。この「隣人の住む」といふ「用」が異なる双方の現はれの中に共通に存する。すなはち二つの多様性は 最初から 「用」によって つなげられてゐるのである。対象の自己同一性は かくて「用」の同一性に 由来する。これを 意識の層に求めても 求め得るはずがない。かくて「無限に不完全であるといふことが 物と物の知覚との 相関関係の本質」(フッサール)であるかのごとく 見えてしまふ。

しかし 対象の同一性が 「用」の同一性に基づくことを 認めるに至れば、「私」が目を閉ぢてゐるときにも隣室に行つてゐるときにも、その「用」の同一性のゆゑに、この机は 同一の机として 存在し続け得ることが 理解される。自分が知覚してゐないときは、机の知覚を 他人が神かに 預けておかない限り、机が存在しなくなるはずの バークレーの難関は、「用」に着目するとき 直ちにひらかれる 昨日はじめて會つた人が 今日現はれて、相異なる多様の 質量的与件の 地平的連続が 切れたときにも、私にとって 同一的な社会的個人的な効果を及ぼす人といふ「用」の同一性は なほそこにある。かくて「用」の機能に着目すれば、フッサールの困難も 容易に乗り越えられるものとなる。

対象の形象性

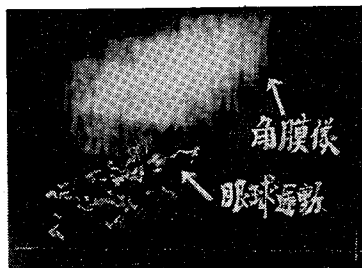
対象は どうして形をもつのか。また 形を知覚的に把握するといふことは いかにして できるのであるか。これも 従来は 対象には 形が形相として 本来的に備つてゐて、意識は それを単に与へられたものとして

受動的に 受けとるもののやうに 考へてゐた。しかし 我々の実験現象学的研究の成果は、形の認知や知覚がそんなに簡単なものではないことを 教へてくれてゐる。

例へば 観察者を閉目させて 鉛筆を握らせ そのまま 手を動かすことなく 掌の触感を介して この形を 認知させる。その際、その品の何であるかを 予め知らせておかないとすれば、観察者は漠然と 横長のものらしいといふ程度の 返答しか なし得ない。ところが今度は 指一本だけ使つて 指の運動によつて 撫でることを許すと、撫で運動をする指先に 疑ふ余地のない 横長の形象が 現はれる。かく 静止の触を介しては 物の形象の認知は 得られないが、運動する触を通じては 形象があらはになるのである。これに附随して、触感自身も D・カッツの いはゆる「現はれ方」にあたる 対象性の変化を見せる。触れる手を運動させれば 対象的な「表面触」が得られるが、手を静止すれば 非対象的な「平面触」しか得られない。かくて 物の形象の認知には 認知する主体の運動を必要とすることが 確められた。ただし この運動は 任意であつてはならないであつて、対物の外線に沿つた運動 で なければならぬのである。この意味は 後ほどさらに 高次的に 明かにされる。

これは 視覚的認知の場合でも 同じい。視覚の場合には、眼は 光学機械と考へられ、形象を見るとは、目をもつて 光学的に寫しとることだ、と考へられ勝ちであつた。しかし 形を見るときは 簡単なことではない。我々の 眼球運動の研究の結果 わかつたことは、眼は 物を見るとき 対物の外線に沿つて 視線による撫で運動を行つてゐることであつた。そしてこの場合 視線の静止してゐる瞬間はないのであつた。眼が運動中に瞬間的な停止をしつつ その停止の間に 対物を寫しとつてゐるのだ といふ従来の考は、実証的には 支持されないものと 判明した。

物とは何か



文字を読みとるときの 角膜
上の映像と 眼の運動軌跡
(著者原図)

ここに掲げた写真は PSYCHE の文字を読みとるときの 眼の動き方を撮ったもので、上の部分の像は この文字の角膜像である (P や E の文字が写って見える)。下の部分は このときの 眼の動きの軌跡 (小光点の角膜像) である。軌跡はごらんのごとく 乱れた珠数の形をしてゐるが、その珠数の球の部分も、よく検すれば 点ではなく、微細な円形であつて、眼はそこで停止してゐないことを示してゐる。眼は 文字の認知の進行中、たえずこのやうな 停止のない 視線による撫で運動を 行つてゐるのである。カメラと全く異なる 眼のこのやうな用ゐ方に 注目すべきである。(注③⑨参照)

眼は「体」的には (構造的には) のことを 行つてゐるのである。

カメラと異ならないが、「用」的には (使用方法としては) それと全く反対

眼の場合の 視線をもつて撫でる運動は、触知の場合の 指をもつて対物を撫でる運動と 本質的には 全く同じものである。ここにおいて 触的認知の場合も 視覚的認知の場合も、撫でる行為が 対象の 形象を形象たらしめるのに 重要な役割をもつてゐることが 示された。そして物の形象は、この認知者の側の 適切な運動を通じてのみ、それとして現はれるのである。対象に 本有的に固着してゐる形相のごときものは、あり得ないのである。かやうな任務をもった 眼や手指の運動については、その意義を さらに高次的に 探究せねばならない。何ゆゑに 運動が 形の認知において 介在せねばならぬのか。運動は 本質的には 一体なにをしてゐることなのか。

我々の探究の結果は、この運動の高次的意義において 次のことを開示する。この運動は いつも対物の外割線に

沿ふ繰返しの撫で運動であることを上に語ったが、この外劃線に沿ふ運動は、運動を通じて領域区分を行つてゐたのであった。つまり物に帰属せしむべき領域と物の外の領域に放ちやるべき領域とを、その運動を通じて区分する操作なのであった。それは刻々に得られる触または視印象の多様を運動を通じて聯繫させ、一つの形といふ体系的なものに仕上げてゆく操作なのであった。運動の繰返しは、その仕上げを確実にする必要からのものであった。そして外劃線は、領域の境界にあたるところとして、いはば問題区域として、領域区分の運動をとくにそこに引きつけたのである。この場合輪廓は領域区分操作に先行して即・自・的・にそこにあるのではなく、領域区分操作の道程の中で、その操作を通じてはじめて、物の領域の限界線となつて顕現したのであった。目や指手の撫で運動はかやうな意味をもつものであった。領域区分操作は本質的に分類操作なのであった。分類には、領域カテゴリーの潜在志向聯繫が前提されるのであつて、従つてこれは高度の知性的操作といはなければならぬものであることがわかつた。かくて△を□と見るだけの一見簡単きはまる知覚作用も、高度の知的能作を基盤とする行為なのであつた。^⑩

なほこのことと軌を同じくするものとして眼科医 M・von ゼンデンの手術開眼者の例を引用しよう。手術によつて開眼した先天盲に、厚紙でつくつた△や□の型を示すとき、開眼後日がたつてゐない場合は、開眼者はこれを眺めまはしても結局その形を見定めることができなかった。ところが閉目して触れることを許すと、直ちにこれは△だとか□だとか言ひ当てることができた。彼が視覚だけで形を見定めることができるやうになるには開眼後日数を経なければならなかつた。^⑪

かくのごとく形を形として認知するためには、領域区分のごとき高級の操作を會得しなければならぬので

物とは何か

あつて、それには 練習を積み重ねなければならないのである。形象は かやうな操作を経て それとして 把握できるものなのであつて、対象の側に 超越的に また本有的に 具備されてゐるものではない。それは 見ること 触れること の操作を通じてのみ 意識に顕現するものである。いはば 形象は このやうな 人間の側の行為が 対象に賦与したものであつて、即自的な何ものかから 人間の側に与へられたものではないことに 注意せねばならない。所与といふ表現は 逆に対象の方向に 用ゐねばならない 表現なのである。

動くものの認知

かく 物を物たらしめ 対象を対象たらしめるものが、実は 人間の側の 行為的なものであることは、上の幾つかの事例が、これを語った。それにも拘らず 従来の思考に固着する人は なほ 容易には その思考的洞窟の中から 出ないであらう。そこで 次にもう一つの 我々の実験現象学的成果をつけ加へて これを説得しよう。

従来の哲学では 対象といへば 静止した形象を指してゐた。これに対して 運動するものことは 認識論的にも存在論的にも まともに問題にされたことがない。動くものの動きは 一体何ものであるのか。また 動いてゐるものの動いてゐることは いかにして意識に上るのか。またそれと 静止した形象の認知との間に、いかなる差異があるのか。

かく開き直つて訊くならば、従来の哲学者からも 心理学者からも、動くものとは 対象の空間的定在の変更つまり空間的移行の 意識的反映である、といふやうな答が 返ってくるのではあるまいか。すでにデカルトにおいては それは 相対的位置の変更に すぎなかつた。^④ フッサールにおいても 静止した対象の形象は それに本有的に

属した形相の意識における射映であり、運動は空間的移動の射映である、といふことにならう。

しかし重ね重ね強調してゐる通り、かりに超越の彼岸で何かの事態があつたにしても、それをそれとして意識に上すには意識する側に条件があるのであつて、その条件から外れた存在や出来事は、人間にとっては非存在であるにすぎぬのである。

空間移動といつても、その移動があまりに緩慢なものであれば動きとしては意識に上らないことは、容易に認められよう。また移動があまり急になれば、それも意識に動きとしては登場しないのみか、この場合はその移動するものが、非存在の世界へと没してしまふ。目の前をよぎる弾丸は、いかにしても見る事ができない。移動が手ごろでないとき動きとして扱へられない。手ごろといふのは人間の側の条件なのである。

(この説き方は従来の思考方式を固執する人達に説くための便法として、仮に採つてゐるものにすぎない。我々は超越世界や物自体的なものを設定することを、まともにやつてゐるのではないことを、断つておかねばなるまい。)

人間の側の条件はもののあり方に、もっと深く食ひ込んでゐるものであることが、我々の研究でさらに判明した。動いてゐるものの動きの把握には認知者そのものが静止してゐることが、必須条件としてなければならぬ。つまり動いてゐるものの動いてゐることを視覚的に扱へる場合には、視線を一点に凝固させること、触覚的にそれを扱へる場合には、触れる手を静止させることが、それぞれ必須条件である。もし認知者の視線なり手なりが動くものと共に移動してしまふならば、たとへ空間移動なるものがいはゆる「客観的に」存在しても、それは我々と無縁故となり、見られるものは静止となつてしまふ。かくて動きを動きとして把握するには、主体

物とは何か

の静止が条件となるのであり、この静止の介在によって、動きが動きとなって、顕現するのである。

かくのごとく、動きを動きとして把へる、といふ簡単なことも、人間の条件が、基礎的条件となるのであって、単に、超越的事象の意識的投射などとしては、理解できないものを、含んでゐることを、知らねばならぬ。

かく、動きを動きとして成立せしめるには、主体の静止を必要としたが、形状の認知の場合には、さきに詳述したやうに、事情が異つてをり、この方では、主体の側での、能動的な運動を、必要とした。ここにおいて、運動の把握には、主体の静止（受動的態度）をもつて、対処せねばならぬのに対して、形象の把握には、主体の運動（能動的態度）をもつて、対処せねばならぬといふ、対比を見る。かやうな、対応的対処をもつて、はじめて、運動は運動となり、形象は形象として、意識に顕現するのである。

形の認知は、すでに示したごとく、カテゴリー的操作を含み、高級な、知性の働きに基いて、なされるものであつたが、運動の認知は、ここに明かにしたごとく、知性的な操作を要せず、受動的な受容態度の対処で、すむ。これは形の認知と、動くものの動きの認知、との間に、基本的な、機能的差異のあることを、語つてゐる。かく運動を見ることと、形を見ることは、それに対処する操作の、水準が違つてゐるのである。運動の認知は、形象の認知に比し、原始的だ、といはれる理由は、ここにも見出される。

運動知覚の原始性については、従来、生物学者や一部の心理学者には、氣附かれてゐた。動くものへの反応は、広い範囲の動物段階に、ゆきわたつてゐるが、形象の認知は、知能的に最高度の発達をとげた人間の、特技である。

以上説くところによって、対象が対象であることの 全面にわたって、人間行為が 支配的立場に立つてゐることが理解されよう。この行為的なものを通じて、はじめて 外界は 我々の 日常相対し相まみえるやうな姿に 顕現し得るのであり、この行為的なものを除外して、それ自体ある外界 などといふものは 凡そ意味のないものといはなければならない。我々は 空間や時間さへ 行為的なものとして理解し直すべきときに きてゐる。認識論のごときも 意識的・認識論から行為的・認識論へと 根本的変改をなさねばならないときに なつてゐる。

(六) 身体の問題

「物」の問題につらなつて 身体の問題を登場させないでは、片手落であらう。我々は 殆んど限なく 身体といふ名の「物」で でき上つてゐることは、冒頭の叙述でも 見たところであつた。我々が半ば「物」であるとするれば、「物」とは何か の問題に、身体を登場させずには すまされない。

従来 身体の処理を、哲学では どうつけてゐたのか、哲学史を溯つて詳述するいとまはない。しかし この問題については、現代哲学の中では サルトルとメルロー・ポンティに 触れざるを得ない。ハイデガーはといへば、A・de ヴァアレンが指摘するやうに「存在と時間」の中で 十行も 身体について 書いてゐない。

身体は サルトルによれば「私がそれであるところの道具」であり、身体が そのまま意識であり、意識が そのまま身体である。彼は 対自存在を 主観のやうな 宙に浮んだ存在 とすることなく、具体的身体として 把へてゆかうとするのであつて、彼は ハイデガーに倣ひ *exister* を他動詞に使つて、「意識は身体を実存する (la

物とは何か

conscience existe son corps)」と 表現する^⑩。

サルトルの立場は 全く意識主義であって、意識が身体を実存するのは 意識としてである。彼は 意識と身体との関係を 実存的関係に昇華させる 意図であつたに拘らず、完全に 意識の層にとどまつてしまった。しかし「物」の場合と同様、身体もまた 意識の面から見たのでは、その正体は見究めがたいのである。

メルロー・ポンティもまた、身体を 知覚の側面のみから 見る。彼は、たとへば 奥行は、私のゐる「ここ」から「そこへ」と 測られるもの、つまり 身体としての私に 開かれるものであり、奥行を見る といふ中に 私 が 身体として存在する ことが 前提となつて 含まれてゐる、人間的認識は、必ず 身体を通じてでなければ 行はず、知覚における展望性（射映）を形づくるものは 知覚主体としての 私の身体である、とする^⑪。

かくメルロー・ポンティは 知覚を主として 身体問題を論じてゐるのであつて、これまた 意識の立場を 一歩も踏み出しては をらないものである。

メルロー・ポンティはまた「身体としての私」から出発するが、そこに 問題とすべきところが 飛び越えられてはゐないか。何ゆゑに 目や手足などが すべて そのとき 私であり得るのか、を問ひたい。身体が いかにして「身体としての私」に化するのか、を問ひたい。

さきに我々は、視覚的に把へた対象としての 身体は、皮膚の外線の輪廓による 内部領域である、と述べたが、それは 身体を あくまで外から 対象として眺めたときの 視知覚的認知について 語つたものである。しかし 身体の内・部に生・きる立・場・から見たとき、私は皮膚の輪廓の内部にとどまつてゐる、といへるだらうか。なるほど 皮膚の輪廓に当るところに触れれば、丁度そのところに 私が触れたとの触感が起る。しかしその 丁度そこに

感ぜられる　といふのは、心理学者のいふ「定位」が　そこなされた　といふことに過ぎないのであつて、そこに私の限界が　本来的に（超越的に）ある　といふことではない。その証拠に　同じく皮膚の面に受ける　冷たさは、時としては　皮膚のその部分に定在して　感ぜられることもあれば、また　水が冷たい　外気が冷たい　といふやうに、身体外劃から飛び離れたところに　定置させてしまふこともある。私を　皮膚に閉ぢこめられたもの　と見ることは、幼稚すぎる見解である。メルロー・ポンティのいはゆる　身体の面義性も、この種の見解の部類に入る。

ところで常識的に言つて、目や手足は　確實に私の身体の一部であり　私の領域のものである。同じやうに、私の髪の毛一本一本や　手の爪や　さては　口の中の唾液にいたるまで、とにかく　私の身体の一部に違ひない。しかし髪や爪を切り離れた瞬間に、それは　もはや私の一部ではなく、単なる外物になる。痰や唾は、口から外に吐き出されるや、私と縁故のない　汚物と化してしまふ。

物が　私の一部になるか　単なる外物となるかは、私とのつながりが　あるかないか　で決まる　といつてよい。ただし　このつながりとは　空間的なつながりではなくて、機能的つながり　すなはち「用」のつながり　である。それと共に　私といふものも　実体的な私と解すべきではなく、機能的に解した領域としての私　と解せねばならない。かくて　物は　私と　「用」的につながり　私の領域に取込まれてゐる限り　私の一部をなすが、私の領域から離れる瞬間に　外物となつてしまふことになる。目や手足が　私の一部となり「身体としての私」ができ上るのは、身体の各部が、私の機能的領域に　取込まれることによつて、生きはじめ　からである。

機能的つながりをつける　といふことは、「用」の機能的つながりをつける　といふことであり、それによつて本来的に生命をもたないものに　生命が吹き込まれるやうになる。このことは　手足や目と同様、一般の事物につ

物とは何か

ても 言ひ得ることであり、私の手にする杖は 私の腕の延長となり 私の触感部位は 杖の先に移り住み、杖の先に触感が定位されるやうになる。かくして杖は 私の腕と同じく 私の生き身の一部を 構成する。剣豪は剣の先にまで 感受の能をひろげて 剣先に生き、乗馬の達人は 馬を おのれの身の一部として 馬に生きる。

このやうに 物は 生きものの領域に 取込まれることにより、化して 生きものに 変ずる。それが身体である。従つて身体は、「用」の機能性に基づいて 流動的に理解すべきものである。東洋流儀の直観は すでに このやうな真実を見通してゐる。物変じて生を得る。などの考へ方は、凡そ西洋形而上学のそれと 対照的であるが、東洋の融通無碍の観点には 多くの真理が含まれてゐる。我々の探究の成果は、むしろ この流動的な考へ方の正しさを裏書きしてゐる。

(七) 制作作用としての意識作用

上に見てきたやうに、我々が 物を知覚し これを意識に上すためには これを個体化することが 必要であつたが、個体化とは 周囲の領域からの切りとりを 含んでゐた。このことに加へて 物を意識することの中に 選択の過程が入つてゐることは、すでに 或る程度 知られてゐる。日常経験において 我々が意識するのは、刻々には たつた二つか三つの 対象であり、他のものは 意識から隠されてゐる。そして 注意を向けるに應じて 意識の前に 立ち現はれる。いかに多くのものが 隠されてゐて 次々と立ち現はれるか、もう一度 冒頭の叙述に帰つて みてほしい。かく我々は、意識することにおいて 選択を行つてをり、必要のもののみを 意識のキャンパスの枠中に

とり入れ、他のものはカンバスの枠の外に放り出しておくのである。

必要な対象のカンバスへの取込みにおいても、それを知覚するといふことは、写真的に写しとるといふことと同じではない。そこもまた選択が入り、「用」に呼応する対象の変容が大幅に起るのである。

対象を選んで周囲から切りとり、これを見る側の「用」に合はせて変容してゆくこと——この過程を経て物を意識に上すといふこと、この操作過程は画家の描画の過程そのままである。画家はその「見る」において、眼前の対象を周囲から切りとり、描かんとするものを選び、他をカンバスの外に捨てる。そして描くといふ操作の中に、対象の変容を自在に行つて、それをカンバスに投射する。画家の「見る」はこのやうな構造のものである。我々が対象を「見る」のもまたこれと酷似の機能構造のものであり、画家がその見るものをカンバスに投射するやうに、我々は知覚的に見るものを意識へと投射するのである。ここにおいて、我々の「見る」はその本質において、画家の「制作する」行為と異ならぬことがわからう。

芸術的に見るといふことも、かく本質的には我々の日常の知覚作用と同じことを行ふにすぎないし、芸術的制作もまた、意識するといふことと本質的に違ったことを行ふのではない。芸術活動の本源的なものは、かくて日常的な行為に由来する。それと共にまた物を「見る」働きも、その本質を芸術的制作と見ることによつて、一層その本質に触れたことになる。

かくして我々の前に顕現する世界は、知覚的には人間行為によつて描かれた絵画であり、人間は描きつつ描かれたものを与へられたものとして眺めるのである。描かれるものの中には、描く行為は描かれない。それと同じく、見るにおいては、見られたものの中に、見ることを見ることはない。対象の意識の中で、我々は意識

物とは何か

することを意識することがない。すべてを対象に預けて、意識することそのことは無のごとくになる。ここにおいて対象は超越存在の姿を装って、即自存在であつたかのやうに振舞ふのである。そのことを、我々は「存在と行動」の中でもすでに示した。^⑤

以上 我々は、物や対象についての 我々の所見を、憚るところなく開陳した。物は人間の行為的生産だ、とする 我々の基本思想は、もしこれを 観念論に類する と解する人があるならば、その人には 今一度 以上の論述を よく読み返してもらふ外はない。観念は 意識作用にすぎず、意識は 受動的にものを写し出すだけの 働きにすぎぬ。意識の層に立つかぎり 「物」の「物」たるゆゑんが解けぬことは、縷々語り盡したところである。しかし行為は然らぬ。行為は 能動的であつて、ものを作り出す 動力である。我々は、作る（こわす 変革する）ことを本性とする この能動的能作を 認識の根據と見、また進んで 一切の存在の根源と見ようとするものなのである。

註

- (1) Silvio Canestrini, Über das Sinnesleben des Neugeborenen, 1913, *Monographien aus dem Gesamtgebiete der Neurologie und Psychiatrie*, Heft 5.
- (2) E. Kant, Kritik der reinen Vernunft, XXVI.
- (3) E. Kant, Prolegomena, S. 288.
- (4) E. Husserl, Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie, *Husserliana*, Bd. VI, 1954, SS. 25 ff.
- (5) E. Husserl, Philosophie als strenge Wissenschaft, *Logos*, Bd. I, 1910, S. 310.
- (6) E. Husserl, Cartesianische Meditationen, *Husserliana*

- I, Text B, 1963, S. 78. なお Ideen zu einer reinen Phänomenologie, u. s. w., I などにも同題名の記述がある。
- (7) Husserl, ditto, S. 82. なお前出の Ideen にも同様の記述。
- (8) Husserl, ditto, S. 92.
- (9) Husserl, Die Krisis der europäischen Wissenschaften, u. s. w. Husserliana Bd. VI, 1954, S. 108.
- (10) M. Merleau-Ponty, Phénoménologie de la perception, 1958, p. 81.
- (11) Merleau-Ponty, ditto, p. 81.
- (12) Merleau-Ponty, ditto, p. 83.
- (13) Merleau-Ponty, ditto, p. 82.
- (14) Merleau-Ponty, ditto, pp. 9 et suiv. フッサールもたとへば紙に注意を向けてゐるとき、紙の周囲のものが直観野にはあるが、それとして取出して指定はされない。つまり物の知覚は背景観(Hintergrundsschauung)の庭をもつてゐる。そしてまさにその自由な転向によつて、全體的に意識されてゐる対象を、注意して知覚された対象に変へることができると述べてゐる(E. Husserl, Ideen zu einer reinen Phänomenologie, u. s. w., S. 77)メルロー＝ポンティはこれに示唆を待たものではないかと思はれるが、今は追跡しない。
- (15) E. Husserl, Cartesianische Meditationen, S. 82.
- (16) Husserl, ditto, S. 83.
- (17) 対象は射映を通じてしか把握できぬとか対象の存在は汲み盡しがたいなどといふ思想はサルトルやメルロー＝ポンティからもフッサールから相続してこれを保つてゐる。
- (18) J.-P. Sartre, L'être et le néant, 1943, pp. 30 ff.
- (19) M. Heidegger, Sein und Zeit, 1926, SS. 67 ff
- (20) 本文のことく1935～1936の講義を出版したのであるが、刊行は1962年に行はれた。
- (21) M. Heidegger, Die Frage nach dem Ding, 1962, SS. 20.
- (22) Heidegger, ditto, S. 18～19 u. 157.
- (23) この書には“Zu Kants Lehre von den transzendentalen Grundsätzen”といふ副題がついてゐるりとを全頭において見よう。
- (24) M. Heidegger, Vorträge und Aufsätze, 1954, S. 169.
- (24) Heidegger, ditto, SS. 170～172.
- (26) Husserl, Ideen, SS. 100 ff.
- (27) Husserl, Philosophie als Strengewissenschaft, SS. 341. 及び Ideen, SS. 13 ff.
- (28) Jean-François Lyotard, La phénoménologie, Collection 'Que sais-je?', 高橋允昭訳 5頁。
- (29) フッサールの用語。たとへば Husserl, Cart. Med. の第1省察第6節などに詳しい。
- (30) 池上鎌三「個体の本質について」哲学雑誌第64巻72号昭和24年2月。
- (31) M. Wertheimer, Untersuchungen zur Lehre von der

物とは何か

Gestal. Psychologische Forschung. Bd. 4, 1932.

- (32) E. Rubin の記述以来 心理学書によく現はれるやうになった現象。

- (33) 結城錦一・橋本雅子「輪廓と恒常性」日本心理学大会発表論文集 昭和39年。

- (34) D. Katz, Die Erscheinungsweisen der Farben, 1911 (新版 Der Aufbau der Farbwelt, 1930) で 実験現象学的に取り上げられた色の現象。表面色は 対象と見られたものの表面に属する と見られる色で 定位ができるもの。平面色は 定位ができず 非対象的に見られる色。

- (35) 結城錦一「存在と行動(I)」北大文学部紀要13巻2号 及び「そのII」同紀要13巻3号 昭和27年。

- (36) Husserl, Ideen, SS. 100ff.

- (37) 結城錦一「形と動き」北大文学部紀要1巻1号 昭和27年。

- (38) D. Katz, Der Aufbau der Tastwelt, 1925.

- 表面触は 色の表面色に該当する対象的な触印象。平面触は 平面色に該当する非対象的な触印象の現はれ方である。

- (39) 結城錦一「眼は何のために動くのか―その知覚心理学的意味」日本心理学大会発表論文集 昭和42年。

結城「〈視る〉と〈運動〉―知覚の刺激主義的見解の排除」日本心理学大会発表論文集 昭和43年。

- (40) B. Erdmann und R. Dodge, Psychologische Untersuchungen über das Lesen, 1898 は 読書中の眼の運動の停

止点のところで 読みとりがなされる といふ論で、それ以来これと類似の見解が 一般的である。

- (41) 結城錦一「形と動き」(前出)
結城「眼は何のために動くのか」(前出)
結城「〈視る〉と〈運動〉」(前出)

- (42) M. von Senden, Raum- und Gestaltauffassung bei operierten Blindgeborenen vor und nach der Operation, 1932.

- (43) R. Descartes, Principia Philosophiae. 桂井一訳「哲学原理」第2部に運動の論議がある。

- (44) 結城錦一「知覚における運動動作的要因」日本心理学大会発表論文集 昭和33年。

- (45) A. de Waelhens. 'La Structure du comportement (Merleau-Ponty)' の解説序文。

- (46) Sartre, L'être et le néant, Cap. II, pp. 365 et suiv.

- (47) Sartre, *id.*, p. 394.

- (48) Merleau-Ponty, Phénoménologie de la perception, p. 81 et suiv.

- (49) 結城錦一「存在と行動(I)」(前出) 51頁以下 及び「そのII」261より264頁。



北大は さきに 私に 実験心理学の学科の創設と その後の運営とを 最もわがままな形で 遂行することを許されたが、私は その恩恵と寛容とに依りかかりつつ、実験心理学から出発して 現象学におもむく通路の開拓に 恵念することを得た。ここに提示する冒險的な試みは、その十八年間の道程における一つの果實である。私は 北大の この問題における恩寵に 心からなる感謝を表しつつ、これをいま 北大に 捧げる次第である。